C—16　明代の服飾について

奈良女大家政　　相川佳予子

1. 2.　中国近代の服装を明らかにするため，明代の服飾について考察を行なった。資料として明の万暦時代の社会小説といわれる金瓶梅にあらわれた服装の記載を中心とし，明史輿服志および物理小識，居家必用などの随筆類，明の定陵の発掘報告，陶器や明錦などの実物資料，絵画などを参照した。

3.　作中人物の服装は官吏，金持階級，一般庶民，道士，僧侶，医師，金持の妻妾，身分のある女たち，召使い階級，くるわの人物などに分類でき，服装や服飾名，衣類の購入,新調,手入れなどの概略を知ることができた。官吏の服装はほぼ輿服志の規定に一致し，庶民についても同様である。男装については，かぶりものは帽と巾に二大別され，毛織，羅緞子などの材料が種々の形式のものに用いられている。衣服は官服では輿服志に記載されている補子の使用がみられ，一般の服装には襖，袗，直裰，道服などがある。女装には長上着，対襟の上着，袖なし，裙などがあり，地質は金襴，緞子，綾子，絖，紗，羅，縮緬，紬などの絹織物や，麻，木綿，芭蕉布など様々で，衣服の形態や寸法は絵画や発掘報告によりある程度あきらかにすることができた。文様は明錦や陶器の中に一致するものを見出すことができ，色は天工開物にみられる染色と同様のものが多くみられた。上記の随筆類を参照して手入，保存の方法もあきらかにすることができた。